破滅する悪役女帝の婚約者に転生しました。

（はめつ）（あくやくじょてい）

推し

Hametsu suru akuyaku jotei
"oshi" no konyakusha ni
tensei shimashita.

著
Ryuuichi Suzuki
鈴木竜一
illustration
よだれ

CHARACTER
モリス
王都の騎士団に所属する騎士。真面目でクール、その実力も一級品。
パウリーネ
ロミーナの護衛を務める近衛騎士。王都の騎士団に所属しており、モリスとは同期。
イルデガルド
アズベルの屋敷の近くに住む謎多き魔女。魔法の腕は確かだが、気まぐれで掴みどころがない。大好物はお酒。
ライナン
気弱な性格の駆け出し商人。世界各地を巡って、自分に合った商売の形を模索中。
カルロ
貧民街に暮らす、正義感の強い少年。実はゲーム世界において、とある重要な役割を担っている。
ロミーナ
アズベルの婚約者。ゲームでは氷魔法を操る冷酷な悪役女帝として知られていた。ただこの世界では少し様子が違うようで……？
アズベル
本作の主人公。前世で好きだったゲームの世界に、辺境貴族として転生した。婚約者のロミーナが未来で破滅すると知り、運命を変えるために奔走する。ロミーナは前世での『推し』。

第一章　転生者、最推しの悪役女帝と出会う

いつもと変わらない朝。
いつもと変わらない日常。
今日もそれが始まるのだと思っていたのだが――
「喜べ、アズベルよ。今日、今からおまえの婚約者が我が屋敷を訪れる」
「は？」
「くれぐれも粗相のないようにね？」
「は？」
屋敷の庭で遊んでいる最中に無理やり書斎へと連れてこられたと思ったら急に何を言いだすんだ、父上と母上は。
ふたりとも俺を置き去りにしたまま浮かれている。
「いやぁ、これで我が家は安泰だ！」
「本当によかったぁ……これで今日からぐっすり眠れるわ！」
「ふたりとも、一回止まってもらっていい？」

まだ十歳の俺に婚約者なんて……いや、貴族の世界じゃ別に珍しくもないか。子どもに黙って縁談を進めるなんてよくあることだ。
でも、それにしたって急すぎやしないか？
昨日までまったくそんな話題を出していなかったのに。
普通、こういうのって話がまとまる前に当事者に伝えない？
なんでうちに来る当日の朝に発表するのさ。
「あの、父上」
「なんだ？」
ご自慢の整えた顎髭を満足げに撫でている父上に、俺は率直な疑問をぶつけてみる。
「婚約云々の話はこの際あとにして……なぜこのタイミングでその方はうちに来訪を？　急すぎませんか？」
「うむ。実はこの縁談をもらったのがつい先日でな。相手が公爵家だというから即ＯＫして、『会うなら早いうちがいいだろう』とトントン拍子に話が進んだんだよ」
「ついに我が家にも運が巡ってきたわね、あなた」
「まったくだ！　はっはっはっ！」
ふたりが過去に例のないほど上機嫌な理由がようやく判明。
……なるほど。

うち――ウィドマーク家は貴族と呼ばれてはいるものの、ハッキリ言って弱小。超がつくほどの貧乏貴族だからな。
治めている領地はパルザン地方という山に囲まれた狭い平野地帯で、これといった産業は特にない。典型的な辺境領地ってやつだ。
そんな家の子供に、公爵家の婚約者が決まったのなら、喜ぶのも無理はない。
だが相手側からすると、大事な娘を嫁がせるには少なからずためらいが生まれる家だろう。
そんなうちに縁談が来るとは。
一体どこの物好きだ？
性格が死ぬほど悪いとか？
あるいは、うちに何か弱みを握られているとか？
……ただ、貴族とは思えないほどお人好しの父上がそんなことするかなぁ。
とりあえず、もうちょっと父上に情報を教えてもらおう。
「その物好き――もとい、婚約者ってどこの誰なんです？」
「聞いて驚けよ。なんと公爵家のペンバートン家のご令嬢だ」
「ペンバートン……もしかして、公爵家三女のロミーナ・ペンバートン？」
「よく知っているな。しかし、お会いした時に呼び捨てしないよう気をつけろよ」
「あっ、はい」

……あれ？
俺はどうしてペンバートン家ご令嬢の名前を知っているんだ？
それだけじゃない。次から次へと、彼女に関する情報が頭の中に溢れてくる。
容姿。
声色。
性格。
現在置かれている状況。
いや、思い出したのはロミーナ・ペンバートンのパーソナルデータだけじゃない。
俺がアズベル・ウィドマークとしてこの世界に生まれる前の記憶。それはつまり前世の記憶まで、ロミーナという名前が引き金になって、すべてを思い出した。
ここは【ブレイブ・クエスト】というゲームの中。
俺のいた世界では総ユーザー人口が数億人という歴史的メガヒットオンラインゲームで、俺もよく友だちと夜通しプレイしたものだ。
でもその世界に転生したってことは、前世の俺は死んだんだよな？　こっちの世界の記憶は残っているが、前世での死因とか、ここに至るまでの経緯とかまったく覚えていない。
……まあ、その話題は一旦置いておくとして。
どうせ思い出したところでどうにもならないんだし。

それよりも今は【ブレイブ・クエスト】について情報を整理するのが先決。
このゲームは仲間と協力してモンスターを倒したり、お宝を探したり、シンプルなゲーム性で王道ＲＰＧの流れを踏襲している。さらに魅力的なキャラクターや意外性のあるストーリー、充実したやり込み要素など、見どころ満載だった。
そうしてゲームとしてリリースされるとあっという間にユーザーの心を鷲掴みにした。
かく言う俺もそのひとりで、学生時代は何よりも打ち込んだゲームだった。
婚約者となるロミーナ・ペンバートンは、そのゲームで【氷結女帝】という異名を持つボスキャラとして登場する。
氷属性魔法のスペシャリストであり、氷竜とも契約している強敵で、今俺たちの暮らしているオルメド王国の民を圧政で苦しめていた。
その性格は非情、冷酷、極悪の三拍子が揃っており、あまりの鬼畜ぶりに多くのプレイヤーをドン引きさせた。
ちなみに、主人公に倒された後は消滅してしまうのだが、彼女に協力して同じように悪政に手を染めていたという設定の夫――つまり俺ことアズベル・ウィドマークも一緒に消えてしまう。ようは共倒れということだ。
傍から見たら最低最悪な条件のもとへ転生してしまったと嘆くところだが……俺は密かに浮かれていた。

なぜなら、彼女――ロミーナ・ペンバートンはこのゲームにおける俺の最推しキャラだからだ。
まずビジュアルが好み。
美しいセミロングの銀髪に透き通る翡翠色の瞳……最高だ。
それに加えてカッコいい彼女の氷魔法にも魅せられた。
ただ、俺のロミーナ推しを決定づけた要因は別にある。
それは隠しイベントでほんの一瞬だけ拝める、彼女が穏やかに微笑むシーンだ。
俺はあれに心を射貫かれた。
以来、俺の中でロミーナ・ペンバートンはあらゆるキャラクターの中で頂点となる。
カッコよさと美しさ、そして時折垣間見える可愛らしさが同居する彼女は、今も俺の最推しキャラとして胸に生き続けているのだ――というか、この世界では本当に生きているのだろう。
ゲームでは性格が最悪という描写が多いのだが、どうも過去に家族と何かあったみたいなんだよな。
今後のストーリーにもかかわってきそうな回想シーンとかあったし。
ただ、他ユーザーからの人気はいまいちのようで、公式からも関連グッズの販売情報は何ひとつ出ていない。
一部では今後のゲームの展開次第で人気が出るんじゃないかって話もあったが、それも不透明。
いつかロミーナの人気が大爆発することを信じながら公式の発表を待っていたのだが、その前に

俺はゲームの世界へ転生をしてしまったようだ。
――いや、ちょっと待て。
このままだと長生きできないんじゃないか、俺。
主人公に粛清されちゃうじゃん!?
取り乱しそうになるのをなんとか抑え、冷静になってみる。
今はまだ十歳。ゲームでのロミーナの設定年齢は確か十八歳だから、彼女が悪事を働くまでまだ八年の猶予がある。
それまでになんとかして彼女を改心させれば、あの悲劇を回避できるんじゃないか。
懸念材料があるとすれば、幼い頃のロミーナに関する情報がまったくない点か。
さっきも言った家族に関する話がそれっぽくはあるけど、あまりに情報量が少なすぎる。
幼少期がまともであることを切に祈るばかりだが……十八歳という若さで国を支配し、圧政で人々を苦しめるような人物なんて幼い頃からもう片鱗が出ていてもなんら不思議じゃない。
睨みつけるだけでドラゴンを凍死させるくらいの実力者だし。
あともうひとつ気になるのは、ゲーム内で夫婦関係も一切謎という点。
夫の俺がどういう扱いだったかまったく語られないし、そもそも章の最後に「夫のアズベルも一緒に消滅した」の一文で片づけられるレベル。声優どころか立ち絵すら存在しないのだから、ふたりの詳細な関係性など一切不明なのだ。

しかし、本編で全く語られないとなると、夫の存在は彼女にとっているかいないか分からないほど希薄なものだったに違いない。
言ってみれば、俺はただいるだけのモブ悪役というポジションか。
まあ、そもそもあっちは公爵家だからな。
こっちとは身分が違いすぎる。
大体、なんでうちなんかに――って、そうか。
あの性格を考慮すると、どことも縁談がまとまらなかったのかな。
で、残り物である辺境領主のうちに回ってきたわけだ。
俺の推測なので真実かどうか不明だが、それくらいしか理由が見当たらないんだよな。
「まもなく到着されるはずだ。アズベルよ。心の準備をしておけ」
「えっ!?」
忘れていた。
……もうここまで来たら、腹を括るしかないな。
冷静になろうと深呼吸を挟んだ直後、屋敷で働くメイドのスザンナがノックをしてから書斎へと入ってきた。
「旦那様、ペンバートン様がご到着されました」
「分かった」

どうやら父上も緊張しているらしく、イスから立ち上がろうとして転びかける。それをフォローしようとした母上も転びかけていた。動揺しすぎだろ。
そんな緊張しまくりのふたりを追う形で、俺は玄関まで移動。
途中、スザンナが「なかなか手強いお相手のようですよ？」とアドバイス？　をくれた。
……手強いってどういう意味だと思いつつ、玄関に到着した俺たちは一家総出でペンバートン家を迎える。
「ようこそおいでくださいました！　ささ、こちらへ！」
ニコニコと愛想よく笑みを浮かべながら、ペンバートン家当主――つまり、ロミーナの父親を屋敷内へと招き入れる父上。
肝心のロミーナを捜していると、使用人らしき人物のすぐそばで隠れるように立っていた。
ゲームの立ち絵をそのまま幼くした容姿に、俺は視線も心も奪われる。
イラストとは違う、生きたロミーナ・ペンバートン。
最推しの人が目の前にいる……落ち着けと心の中で何度も唱えるが、まったく効果がない。
俺と同い年で十歳のはずだが、もうなんか完成された美しさがある。
しばらく見惚れていたが、やがて彼女の異変に気づいてハッとなる。
まるで何かに怯えるような揺れる眼差し。
主人公に追い込まれながらも命乞いはせず、最後まで抵抗してみせる胆力を持った原作時の彼女

とのギャップに、俺は一瞬たじろいだ。
この子が本当にあの女帝なのか……？
やっぱり、ゲーム内情報が示す通り、過去に何かしらの事件があって性格が激変してしまったというのか？
「おや、君がアズベルだね」
「は、はい」
もっと彼女のことを知りたくて近づこうとした瞬間、ペンバートン家当主のカリング様に声をかけられた。
「うちの子はどうも緊張しているようでね。よければ、君にここを案内してもらいたいのだが」
「それは名案ですな！　若者同士で語り合いたいこともあるでしょう！」
いや、父上よ……俺たちまだ十歳だからね？　そんな話すことなんてないよ。
とはいえ、お近づきになる絶好のチャンスだ。
「よろしければご案内します、ロミーナ様」
「は、はい」
おずおずと俺の差しだした手を握るロミーナ。
……可愛い。
なんか、原作の雰囲気と違っておしとやかな感じがしてちょっと困惑する。

ともかく、これがこの世界における俺と女帝の初顔合わせ。ここから穏やかな人生を歩むか、奈落の底へと突き落とされるのか――すべては俺自身の行動にかかっているのだ。

父上とカリング様の計らいにより、俺とロミーナは屋敷の中庭にある庭園へとやってきた。

「わあっ！」

ここへ足を踏み入れた途端、ロミーナのテンションがさっきと別人かと疑いたくなるくらいに上がる。相当植物が好きなんだな。

「見てください、とっても綺麗なお花が咲いていますよ！」

「本当ですね。これはえぇっと……」

せっかくだし花を紹介しようと思ったのだが、名前が出てこない。

すると、ロミーナが笑顔で告げる。

「南方原産のランジーという品種ですね。ここに咲いているのは赤色ですが、他に紫や黄色もあるんです」

「へぇ、勉強になるなぁ」

「ペンバートン家のお屋敷でも自分で育てていたんですけど、枯らせてしまって……再挑戦中なんです」

「ははっ、本当に植物が好きなんですね」

「はい！　――あっ！」

突然、何かに気づいたらしいロミーナは口を両手で覆ってしまう。

「ど、どうかされましたか？」

「い、いえ、その……私ばかりが楽しく喋っていて……」

むしろこちらとしてはそれを望んでいるんだけどね。

植物の話をしている時のロミーナは本当に楽しそうだし、笑顔も素晴らしかった。ゲームでは絶対に見ることができなかった、柔らかな表情だ。ゲームでの彼女の表情って、常に眉間にシワが寄っているというか、厳しい顔つきばかりだったからな。

彼女が最推しである俺にとってはある意味で最強の公式である「本物のロミーナ」のいろんな表情を見られて大変満足している。

なので、ぜひこれからもそういう一面を見せてもらいたい。

それが嘘偽りのない本音だ。

「気にしないでください。あなたが楽しそうにしている姿を見ると、俺まで嬉しくなりますから」

「ア、アズベルさん……」

俺の言葉に驚きつつも、ロミーナは笑顔を見せた。

ここまではとても調子がいいな。

儚げで大人しくて清楚――これが数年後にあの女帝へと変わるのか？

ゲームだと町に街灯代わりに断頭台を置くような極悪人だぞ？

一体何があったんだ？
さまざまな疑問が渦巻くものの、ロミーナと一緒に過ごす時間がとても楽しくてそんなことなどどうでもよくなっていた。
最初は緊張気味だった彼女も、徐々に心を開いてくれるようになり、いろんな話をしていく。
このまま平和な時間が流れてくれたら――そう思っていたのだが、ここで異変が起きる。
「あうっ!?」
突然、ロミーナが胸を押さえながらしゃがみ込む。
「だ、大丈夫ですか!?」
いきなりの出来事に動揺しまくる俺。
原作では病気を患っているとか、その手の描写はなかったはず。
とにかく心配になって彼女のもとへと駆けだしたその時、
「は、離れてください！」
力いっぱい彼女は叫んだ。まるでこの世が終わる寸前のような、絶望の表情をしていた――と、次の瞬間、誰かが俺を抱えて倒れ込む。
あまりにも唐突な出来事だったので何が何やらサッパリ理解できないまま、全身を鈍い衝撃が襲う。その直後、「ブシュッ！」という嫌な音が聞こえてきた。
何が起きたのかサッパリ理解できていない俺の耳に「お怪我はありませんか？」という大人の女性の声が届く。
声の主は俺の上に覆いかぶさっている女性で、彼女は肩から出血していた。
まるで鋭い刃物で斬られたような傷跡だ。
……というか、この人は誰だ？
まったく面識のない人だぞ？
「えっ？　えぇっ？　あなたは誰ですか!?」
「自己紹介はあとで――いえ、もしかしたら、これでお別れになるかもしれませんので不必要かもしれませんが」
「えっ？」
何を言っているんだと思いながら視線をロミーナの方へ向けると、彼女は気を失っているようで地面に横たわっていた。
そんなロミーナの周囲には、巨大な氷の塊がある。
氷はまるで剣のように鋭く四方に伸びており、女性はそれが原因で傷ついたようだ。
ということは、彼女は俺を守ってくれたのか。
事態を把握すると、騒ぎを聞きつけて父上たちがやってくる。
とりあえず、俺に怪我はないのでそう伝えた後、詳しい事情を聞くために屋敷へと戻った。

気を失ったロミーナを客人用のベッドへ寝かせる。
対応してくれたスザンナも、庭園の隅から俺たちのやりとりを見守っていたらしい。
危うく俺は串刺しになるところだったらしく、「よがっだでずぅ！」と泣きながら俺を抱きしめてくれた。
俺は父上に書斎へと呼ばれたのでスザンナにロミーナを任せて訪ねにゆく。
「申し訳なかった」
書斎に入って早々、謝罪の言葉を口にしたのはカリング様だった。
曰く、ロミーナは幼い頃から常人を遥かに凌ぐ魔力を宿しており、将来は立派な魔法使いになるだろうと太鼓判を押されていたらしい。
――が、小さなあの体ではその膨大な魔力量をうまく制御できず、感情が昂ると先ほどのように意図しなくても勝手に魔法が発動してしまうケースがあるという。
ペンバートン家の縁談がまとまらなかったのは、それが原因であったようだ。
当然、父上はロミーナの事情を事前に聞いていたようだ。
しかし公爵家との縁談ということに目がくらみ、その件については全く気にしていなかったとのこと。
でも、感情が揺れ動くような出来事なんてあったかな？
その理由については、同席している俺を助けてくれた金髪の女性が説明してくれた。

「お嬢様は、心からアズベル様と過ごす時間を楽しまれていました」
彼女はパウリーネさんという名前で、ロミーナの近衛騎士だという。
「久しぶりになんの偏見もなく接してもらえたことが凄く嬉しかったのだと思います。その嬉しいという感情が暴走して先ほどの氷魔法が発動してしまったのでしょう」
それはまたなんとも……。
というか、その原理が本当だとしたら、俺はロミーナと楽しく会話するたびに命の危険にさらされるのでは？
「私も楽しそうにしているあの子を見て、今度こそと思ったのだが……すまない」
うん？
なんだか、カリング様はこの縁談が終わってしまうみたいなシメをしたけど、もしかして父上との話し合いで破談が決まったのか？
「あの子に婚約者はまだ早かったようだ。もう少し成長して、しっかりと魔力を制御できるようになってから――」
「待ってください！」
たまらず、俺は叫んでいた。
確かに命の危険があるかもしれないけど、俺はそれ以上にもっとロミーナといたいという感情が芽生えていた。

最推しキャラであるロミーナが成長して闇堕ちし、主人公に倒されて破滅しないためにも。
同時に、それは俺の命を守るためでもある。
ロミーナが救われて、今のまま成長を続けていけば、きっと闇堕ちなんてしない。そうすれば彼女にとっても明るく楽しい未来が待っているはず。
あの子を助けたい。
闇堕ちして主人公に討伐される最悪の未来を回避したい。
そのためなら、俺にできることはなんでもやる。
だからまずは――
「僕はまだロミーナ様と一緒にいたいです」
俺がそう告げると、カリング様は驚いた表情になる。
「し、しかし……」
「僕も彼女と過ごした時間はとても楽しかったですし、彼女をもっとよく知りたいと強く思いました。どうか……ロミーナ様との婚約を認めてください」
「き、君はそこまで……」
カリング様にとって、俺がここまで食い下がるのは予想外だったらしく、かなり動揺していた。
さらにここでありがたい後押しが。
「私からもお願いします。今のままですと、ロミーナ様は親しくなったアズベル様を氷魔法で傷つけてしまったがために嫌われ、別れるということになったと思うはず……そうなれば精神的なダメージは計り知れず、魔法制御がより困難なものになるかもしれません」
護衛騎士であるパウリーネさんがそう言うと、父上も加勢してくれる。
「ロミーナ様の魔力制御についてですが、我が領内にこの手の専門家が住んでいますので声をかけてみます」
そんな人材がこの辺境領地にいたのかとちょっと気になる。
この地方はゲーム内だと名前すら出てこないド田舎だからな。
まあ、この流れで嘘をつくとも思えないので、心当たりがあるというのは本当なのだろう。
「……うむ。では、君にロミーナを任せてもよいかな？」
「は、はい！」
カリング様は婚約を認めてくれた。
俺だけじゃなく、パウリーネさんや父上もホッと胸を撫でおろしている。
父上については公爵家とのつながりを持てたという安堵感からなのかもしれないが、根は悪い人じゃなさそうだし、大丈夫だろう。
その後、俺たちは目覚めたロミーナへ会いに行った。
「ロミーナ様、気がついたんですね」

「っ！」
部屋に入ってすぐに声をかける。
ロミーナはビクッと体を強張らせてから目を伏せる。こちらと視線を合わせないようにしているようだけど……やはり氷魔法が暴走した件を凄く気にかけている様子だった。
「申し訳ありません。すぐに立ち去りますから」
絞り出すようにして言うと、彼女はベッドから起き上がって帰り支度を始めようとする。どうやら、彼女は婚約を解消されたと思っているようだ。
気がつくと、目に涙を浮かべながら俺の横を通過しようとするロミーナの腕を掴んでいた。
「えっ？」
突然の行動に思わず声をあげたロミーナであったが、これから俺が話す内容はさらに彼女を驚かせることになる。
「あなたとの婚約は解消しません」
「ど、どうして……」
俺は震える彼女の手を取って、そのわけを語る。
「庭園であなたと過ごした時間はとても楽しかったんです。魔法の暴走に関しては、うちの領地内に専門家がいるようですので、まずはその人に頼ってみようと思っています」
「アズベル様……」

徐々にロミーナの顔つきが変わっていく。
やがて何かを決心したかのように唇をキュッと噛みしめる。
そして彼女もこの地に残りたいと、後ろで俺たちの様子を見守っていた父であるカリング様に強く訴えた。
本人も望んでいるのならばとカリング様は改めて婚約を認め、こちらへ移り住むための準備を整えるべく、一度戻ることになったのだ。
「アズベル様、しばしのお別れです」
「俺のことはアズベルでいいですよ、ロミーナ様」
「で、でしたら、私のことはロミーナとお呼びください」
「よろしいのですか？」
「はい。あ、あの……それに敬語は禁止というのはいかがでしょうか」
おずおずと申し訳なさそうな感じで彼女はそう提案する。
「私たちはふ、夫婦になるんだから」
白い肌を赤く染め、俯きながら、ロミーナは言う。
天使だ……天使がいる……はっ!?
危うく魂ごと持っていかれるところだった。
この笑顔を曇らせないためにも、頑張らないとな。

そのためにまずやるべきは……俺自身の実力を把握しておくことだな。

第二章　悪役女帝の田舎暮らし

ロミーナがこちらへと移り住む準備が整うまであと二日はかかると、ペンバートン家からの使いがわざわざ伝えにきてくれた。

ちなみに、ペンバートン家にはロミーナの姉がふたりいる。

どちらも将来性抜群の美少女――というのが、ゲーム内での説明であった。

だがゲームと同じく、このふたりの姉とロミーナは折り合いが悪いらしいとメイドのスザンナが教えてくれた。

父上にもそれとなく尋ねてみるとカリング様もそこを危惧しているという。

父親としては三人とも可愛い愛娘。ただ、ロミーナはその常人離れした魔力量のせいで魔法が暴走することが多く、なかなか縁談がまとまらなかった。

ふたりの姉は、その余波が自分たちの生活にも影響を及ぼすのではないかと恐れている節があるみたいだ。

カリング様がロミーナをこっちで暮らさせるようにしたのも、ふたりの姉妹と距離を取らせるためだろう。

やはり、これがロミーナが闇堕ちする原因のひとつ――つまり、家族仲の悪化だろうと俺は推察していた。

しかし、家族の関係となると手出しは難しい。

そもそも、ふたりの姉妹に関してはまだ会ったことすらないからな。

……でも、ロミーナが姉たちのことで傷ついているというなら、こっちでの生活でそれを少しでも癒してあげられたらと思う。

さて、彼女がこちらへと移り住む前に確認しておきたいことがある。

それは――「俺に何ができるのか」という点だ。

原作【ブレイブ・クエスト】では立ち絵すらないモブ中のモブだったわけだが、もしかしたら俺にも未知の力があるかもしれない。

というわけで、自分の可能性を知るために今日も屋敷の庭で特訓に挑むのだが――

「うーん……」

状況は芳しくなかった。

【ブレイブ・クエスト】においてもっとも応用が利き、なおかつ習得もしやすい、『属性魔法』ならば身につくだろうというのが甘かったか。

魔導書を読み漁っていたのだが、まったく魔法が発動しないのだ。

ちなみに属性魔法とは火、水、風、雷、地の五属性を操るもので、魔法の中でも王道と言える存在だ。
「頑張ってください、アズベル様！」
「うん。ありがとう、スザンナ」
洗濯物を干しにきたスザンナからの声援に応えつつ、俺は鍛錬を続ける。
せめて、師匠的ポジションの人がいてくれたらいいのだけど、それも難しいかなぁ。
そんなことを思いつつ、魔法を使うという前世では考えられなかったロマンを追い求め、魔力を高めようとする――と、その時だった。
「あぁ、ダメダメ！　なっちゃいないねぇ！」
いきなりダメだしが飛んできた。
しかも、聞いたことのない女性の声だ。
振り返って声の主を確認するが、やっぱり知らない人だった。
年齢は二十代半ばくらいかな。
紫髪に金色の瞳。
顔立ちはめちゃくちゃ美人なんだけど……全身真っ黒なローブ姿というめちゃくちゃ怪しい格好をしている。
女性はゆっくりとこちらへと近づいてくるが――

「酒臭っ!?」
思わず口にだしてしまった。
でも、それくらい酒臭いんだよなぁ、この人。
「おやおや、花も恥じらう齢二百超えの乙女に向かって臭いって発言は感心しないねぇ」
齢二百って……もはや人間の寿命じゃないぞ。
いや、酔っぱらいの戯言って線がないわけじゃないけど。
その時、俺は女性の背後に父上がいることに気づく。
「ち、父上！　この方は誰なんですか!?」
「前に言わなかったか？　ロミーナ様の魔力を制御する指南役としてお呼びした、魔女のイルデガルド殿だ」
「長いからイルデでいいよ。ヒック」
「ま、魔女？」
この飲んだくれのお姉さんが、話に聞いていたロミーナを指導してくれる魔女だって？
おまけにイルデガルドって……あのイルデガルドか!?
【ブレイブ・クエスト】の中でも魔女という存在は確認できる。
中でも主人公の仲間となる、イルデガルドという魔女は別格の強さを誇っていた。
ただずっと仲間というわけではなく、スポット参戦ですぐにパーティーを抜けてしまうキャラな

のだが、まさかウィドマーク家とかかわりがあったなんて。
もしや裏設定とかがあったのか？
いや……やっぱり怪しいよなぁ。
原作でのイルデガルドは謎多き人物という扱い。掴みどころがなく、何を考えているのかサッパリ分からないキャラクターだ。
現に俺もついさっきまで翻弄されていたし。
【ブレイブ・クエスト】はオンラインゲームでストーリーが完結しておらず、そんな中でイルデガルドは主人公にとっては敵か味方かさえまだ明確に判明していなかった。
一部ファンからは真のラスボスなんじゃないかって考察も出ていたほどだ。
スポット参戦の際は利害の一致ってことで一時的に組んだだけだったけど、今回の場合はどうだろう。
いくら父上が信用して呼んだとはいえ、原作での立ち位置からこちらを騙している可能性だってあり得る。
――とはいえ、これはチャンスでもある。
この人の実力は把握している。
ロミーナが悪役として覚醒する八年後では、世界でも屈指の実力者として名が知れ渡っていた。
だがこの頃はまだそこまで高名ではなさそうだ。教えを乞うなら今がチャンスだろう。

そう思っていると、父上が彼女を紹介してくれる。
「常時酒臭いところはあるが、腕はいい。少し離れた森に住み、代々ウィドマーク家の当主たちを助けてくれているんだ」
「あの森は薬草がたくさん生えているからね。魔草薬を作るのにもっとも適しているのさ。いわゆる、持ちつ持たれつの関係ってやつさ」
確かに、ゲームだといろいろ調合して魔草薬を作っているという描写があったな。
なるほどね。
魔法絡みのトラブルというのは起こり得るし、イルデさんの戦闘力ならば用心棒としても申し分ない。凄い人材がいるじゃないか、うちの辺境領地には。
――うん？
ロミーナの魔法制御の指南役というなら、俺も魔法を教えてもらえるんじゃないか？
そう思った俺は、父上が仕事のために書斎へ戻っていったあとで彼女に言う。
「イルデさん！　俺に魔法を教えてください！　実は、独学で会得しようとしているんですけどうまくいかなくて」
「それは難しいね」
「ど、どうして⁉」
「君、死ぬほど魔法の才能がないよ」

「……」
はっ？
なんじゃそりゃ？
「さっき必死に魔力を練っていたようだけど、まるでセンスがない。悪いことは言わないからやめておいた方がいいよ」
「つ、つまり……俺は魔法が扱えないと？」
「属性魔法は難しいだろうねぇ。あの調子じゃ、初級魔法を習得するのに五十年はかかるよ」
「五十!?」
ズバッと一刀両断。
マジかよ……魔法が使えるかもってウキウキしていたのに。
――待てよ。
さっきの言い分だと……
「属性魔法以外なら俺にも扱えるんですか？」
「いいところに気がついたねぇ。その通りさ。水や炎を自在に操る魔法は派手だし戦闘での貢献度は高い――が、それだけで魔法を分かった気になってもらっちゃ困るんだよ」
言われてみればそうだよな。属性魔法以外にも種類はあるわけだし、そっちで輝ける才能があるのかもしれない。

「ちなみに、どんな魔法なら俺に適していると思いますか？」
「君の場合は……生産魔法かねぇ」
「生産魔法!?」
それって、素材を組み合わせていろいろと作りだせるやつだ！
【ブレイブ・クエスト】の中では地味だったが、一部の人からは便利魔法として重宝されていた。
うおぉ……テンション上がってきた！
今後のことを考えたら、下手な属性魔法よりこっちの方が何かと便利かもしれない。
「おや、嬉しそうだね。生産魔法は地味で目立たないから嫌う者も多いが」
「だって、自分の魔法でいろいろと生みだせるって凄いじゃないですか！」
「っ！」
何気なく放った俺のひと言を耳にした途端、イルデさんの目がカッと見開かれた。
もしかして……何かまずいこと言っちゃって怒らせた？
「なるほど。そういう見方もあるか。あたしにはない視点だ」
あれ？
なんかいい方向に捉えてもらっている？
「いいねぇ。あたしは好きだよぉ、君みたいな考え方」
うんうんと頷きながらそう言うと、イルデさんは唐突にパンと両手を叩いてからニッと笑みを浮

かべる。
「気に入った。君に生産魔法を教えてやるよ」
「本当ですか!?」
「新しい気づきを教えてくれた礼さ」
「れ、礼？」
「魔法の良し悪しは使う本人が決めるもの……あたしも長く生き過ぎたせいか、そんな当然のことを忘れて生産魔法は嫌われていると思い込んでいた。何も知らないということは、時にすべてを知る者より優れた発想をする――いやはや、実に面白い」
「は、はあ……」
なんだかよく分からないけど、感謝されているのならヨシとしよう。
それにしてもこの人……第一印象としては、実力はあっても昼間から酒に酔っているダメ人間って感じだったけど、魔法に対しては真摯なんだな。この辺はゲームになかった描写だ。早速だけど、ちょっとだけイルデさんを見る目が変わったよ。
「こいつが本当に地味で嫌われている魔法なのか――それを決めるのは君自身だよ」
「はい！」
「いい返事だ」
その後、早速魔法の特訓を始めたわけだが――俺はまだ完全に魔女イルデガルドを信用したわけ

ではない。
確かにさっきのやりとりで信頼感は増したけど……ゲームで謎の存在扱いをされている以上、最終的に敵になるか味方になるかは未知数だからな。
とりあえずここは友好的に接しておくけど、警戒は怠らないようにしないと。
「さて、それじゃあ始めようか」
記念すべき生産魔法の特訓第一弾。
一体何をするのかと緊張していると、イルデさんは洗濯物を干し終えて屋敷へと戻ろうとしていたスザンナを呼び止めた。
「そこのお嬢ちゃん、ちょっと協力をしてくれないかい？」
「わ、私ですか？」
「最近何か困ったことを話しておくれ」
「こ、困ったこと……」
いきなり話を振られて戸惑うスザンナ。
イルデさんがやろうとしていることがなんとなく分かったかもしれない。
生産魔法でスザンナのお悩みを解決しようっていうのだろう。
「そういえば、近頃暑くなってきたので食べ物がすぐに傷んでしまうのが悩みですね。おかげでメニューを変更しなくてはいけないケースもありますし。一応、氷は常備しているのですが、それも

長持ちはしませんからね」
「ふむ。実にメイドらしい悩みだねぇ」
確かに。前世ならば冷蔵庫に保管しておくのがベストなんだけど、こっちの世界にそんな家電なんてないしな。
「……そうだ」
どこまで実現できるかは分からないが、ふとアイディアが浮かんだ。
「イルデさん……生産魔法の使い方を教えてください」
「おや、何か思い浮かんだかい？　――だったら、あたしがやるように魔力を練ってみな。そうすれば次に何をすればいいか自然と分かるはずだ」
「はい」
俺はイルデさんの見様見真似で魔力を練っていく。すると、目の前の空間に切れ目が出現した。
「これは……」
一体なんなのか皆目見当もつかないが……本能が訴えている。
「こいつに手を突っ込め」と。
それに従って手を伸ばしてみると、割れ目が大きくなった。たとえるなら、チャック付きのカバンを開けたような感覚だ。
「その空間は魔法庫と呼ばれるもので、生産魔法使いにとって命とも言うべき存在さ」

「生産魔法使いの命……って、つまりどういうことです？」
「こいつは鍛冶職人でいう窯のような存在――入れた素材に応じて、使い手の望みを具現化したものを生み出すんだ」
「望みを具現化……つまり想像力が鍵を握る、と？」
「子どもの割に鋭いじゃないか。ツボを押さえているのなら、あとは実践あるのみ。さあ、やってみたまえ」
一方、すぐ横で状況を眺めていたスザンナは瞳を輝かせながら叫ぶ。
「魔法が発動しています！　凄いですよ、アズベル様！」
なぜ俺以上にテンションが高いのか……喜んでもらえて悪い気はしないけど。
とりあえず、使い方は分かった。
俺は魔法庫から手を出すと、腰を落として近くに落ちている石を拾い集める。
「石で何を作る気だい？」
「ちょっとアイディアが浮かんだもので……完成してからのお楽しみですよ。あと、氷を使いたいんで、調理場へ移動しましょう」
「「調理場？」」
イルデさんとスザンナの声が重なる。
さあ、これからが本番だ。

調理場へ着くと同時に作業再開。
料理長のダーネルさんは夕飯の仕込みを行っている最中で忙しなく動き回っているため、それを邪魔しないようにすみっこへ移動。
そこでもうひとつの素材をスザンナに持ってきてもらった。
「こちらが氷になります」
「ありがとう、スザンナ」
スザンナから氷を受け取ると、それを魔法庫の中へと入れた。
「石と氷か。このふたつの素材で何を作るのか見ものだね」
イルデさんがチェックの目を光らせている中、俺は魔法庫の中に入っている石と氷を魔力で融合させていく。
想像……想像するんだ。
俺が望んでいるものを。
そいつが頭の中でハッキリとイメージできたら、今度は魔力を練っていく。
魔法庫の中では徐々に俺の想像が形となってきている――詳細に説明すると難しいんだけど、目を閉じているのにまるで魔法庫を覗き込んでいるかのごとく明確に脳内で映像化できるのだ。
「こんな感じかな……」

思っていたよりもスムーズにできた。イルデさんが見立てた通り、俺には属性魔法よりこっちの適性があったらしい。
「よし。――出でよ！」
俺がそう叫ぶと、光に包まれたアイテムが現れる。
それは一見するとパンを焼いたりする石窯のようだ。
「えっと……これは？」
自分の悩み事がこれで解決するとは思っていないスザンナに対し、俺は「それに触ってみてよ」と声をかけた。スザンナゆっくりと石窯に手を触れるとパッとすぐに離す。
「冷たい!?　信じられないくらい冷たいですよ、これ!?」
「なんと……」
スザンナのリアクションを見たイルデさんも興味深げに触れて、その冷たさに驚いていた。
「名づけて冷蔵庫ってところですかね」
前世の世界では当たり前のように使用されていた家電だが、こっちでは初めて見るものだろう。
もちろん、電力なんてないから、この冷たさをキープしているのは魔力だ。
やがてふたりのハイテンションぶりに気づいた料理長のダーネルさんもやってきて、「こいつは凄ぇ！」と大絶賛。
すぐさま調理場にある傷みやすい食材を冷蔵庫へとしまっていった。

「坊ちゃん、こいつは売れますよ！　量産したら世界中の調理場に革命が起きますぜ！」
「ははは、大袈裟だよ、ダーネルさん」
「とんでもない！　すぐに旦那様にもお知らせをしないと！」
「それはこっちでやっておくよ。それより、夕食の支度をしないといけないでしょ？」
「おっと、そうだった！」
ドタバタと慌てながら、ダーネルさんは夕食づくりへと戻っていく。
これが生産魔法の力か。
「便利だなぁ、生産魔法って」
「いやぁ、君の場合は特別なんじゃない？」
「特別？」
「初めてであそこまでしっかりとした完成品を出すなんてまずできないからね。この魔法は扱いが難しいし、そもそも、生産魔法を活用しようという発想があまりない。みんな属性魔法を欲しがるから」
まあ、実際に冒険者とかで稼ごうと思ったら、属性魔法の方が頼られそうだし、扱い方が難しいのなら尚更だ。
「外見にもこれといった破綻は見られないし、性能についても実に詳しく具現化できている……本来なら数年は修業しないとここまでの域に達しないはずだ」

「そ、そんなにですか⁉」
「うむ。だから、生産魔法使いとしての才能はピカイチかもね」
それは嬉しい評価だ。
ド派手な炎魔法や水魔法に比べたら数段地味ではあるけど、みんなの生活に欠かせないアイテムを作れる。俺としてはこっちの方が遥かに価値のある魔法に思えた。
まあ、モンスター討伐とかには無縁の生活を送っているから、余計にそう思えるだけなのかもしれないけど。
まだまだ素材はいろいろと種類があるし、応用次第でこの冷蔵庫のような、前世の世界で生活を助けてくれていたアイテムを生みだすこともできるだろう。
よぉし……めっちゃテンション上がってきたぞ！
ロミーナのためにも、この地方を改革してやる！

◇◇◇

いよいよロミーナがこのパルザン地方へとやってくる日となった。
今日の昼にも到着する予定らしいので、午前中はイルデさん指導のもとで魔法の鍛錬に挑む。
ちなみに、以前作った冷蔵庫はダーネルさんをはじめとする調理場で働く人たちに大好評。今後

も誰かの役に立つような物を手掛けていきたいと考えていた。
魔法庫の可能性は無限大だ。
こちらの想像力次第でいろんなアイテムを生みだせる。
この前は素材を融合させて冷蔵庫を作ったけど、さらに修業を続けていけば無から有を生みだすことさえ可能になるとイルデさんは教えてくれた。
そう聞いたら、さらにやる気が出てきたよ。
鍛錬が終わると、少し時間が余っていたので屋敷からすぐ近くにあるガナス村へと向かった。
「おぉ、アズベル様」
「いらっしゃいませ、アズベル様」
「こんにちは。今日もよろしくお願いします」
俺はここでよく農作業を手伝っている。
ガナス村は人口百人ほどの小さな村ではあるが、ここでできる小麦や野菜といった農作物は王都にある食堂へも提供されるくらい有名なのだ。
この辺りは土壌が豊かで気候も穏やかだからなぁ。農業をやるにはもってこいの環境だ。
「そういえば、アズベル様の婚約者様がいらっしゃるのは今日でしたね」
「うん。お昼頃には到着するって話だよ」
「なんでも公爵家のお嬢様だそうで……どんな御方です？」

「とってもいい子だよ。――うん。いい子だ」
感情が昂ると自動的に氷魔法が発動するという他の子にはないワンパクな特異体質を持っているが……まあ、それはイルデさんとの特訓でなんとか克服してもらうしかないな。
村民たちとそんな話で盛り上がっていると、突然「ガギン！」という鈍い音が響き渡る。
「ああっ！　くそっ！」
何が起きたのかと周りを見回していたら、鍬を持った中年男性が頭を抱えていた。
あの人は確か、ギニスさんだったか。
「ギニスさん、どうかしましたか？」
「アズベル様……いえ、耕していたら土の中に大きな石があったみたいで……」
「あぁ……見事に欠けちゃってますね」
これでは鍬として使い物にならないな。
新しい物を購入すれば手っ取り早いのだが、あいにくこのガナス村にはこの手の道具を扱う店はない。
一番近い村に行くのも半日かかるからな。移動に一日かけて依頼をした後、完成品を受け取りにいかなくてはいけないので、手間が多い。
――だったら、生産魔法の出番だな。
「それを貸してください」

「えっ？　構いませんが……どうするんです？」
「修理するんですよ」
そう告げて、俺は生産魔法を発動させる。
目の前に出現した空間へ鍬を入れると、修復用の素材として欠ける原因となった大きめの石を放り込んだ。
それから目を閉じて思い浮かべる。あの硬い石が分解し、鍬の欠けている部分を補う。それだけではなく、残った金属部分も強化するように――よし。これでいいはずだ。
俺は目を開けて、前方へと手を掲げる。
するとその方向から欠けた鍬が光に包まれて出現した。
「「「「おおっ！」」」」
居合わせた村人たちは一斉に声をあげる。
「こんなところかな。――どうぞ、ギニスさん。さっきの石を素材として利用したので、頑丈さは増していると思います」
「あ、ありがとうございます！」
綺麗に生まれ変わった鍬を見て、ギニスさんは感激していた。
「いやはや、相変わらず凄い魔法ですな」
「まさに鍛冶屋いらず」

「ワシらのような者たちからすれば炎や風を扱う魔法より、大切な農具をよみがえらせてくださるアズベル様の魔法の方がありがたいですよ」
「そうじゃのう。まさに神様じゃ」
「あはは、大袈裟ですよ」
生産魔法の評判は上々だった。
村人のひとりが言ってくれたように、戦闘と無縁なこの村にとってはド派手で破壊力のある魔法より、生活を助けてくれる工作や修繕ができる俺の魔法の方が役に立つんだよな。
鍛冶屋もいないこの村にとっては、まさにうってつけってやつだ。
農作業を再開しようとしていたら、村人のひとりが「あれはなんだ？」と遠くを指さしながら叫んだ。その先には、数多くの馬車が屋敷の方へと向かっている光景が。
「どうやら、ロミーナが到着したみたいだ」
「えっ？　それはまさか……あの公爵家のお嬢様!?」
途端にその場は騒然となる。
一方、ロミーナが乗っていると思われる馬車は方向転換。
俺のすぐ近くまで来ると窓が開いて、そこからロミーナが遠慮がちに顔を出した。
「やあ、ロミーナ」
「ア、アズベル、久しぶり」

周りに村人たちがいるからか、最初はどこか怖がっているようにも感じたロミーナの表情――しかしそれも俺と挨拶を交わしたら安心したのか緊張が解けて、柔らかくなっていった。
やがてロミーナは近衛騎士であるパウリーネさんと一緒に馬車から降りて、俺のもとへとやってくる。
「何をしていたの？」
「今は野菜の収穫をしていたんだよ」
「ほぉ……これは立派な」
パウリーネさんは近くに置かれた篭に詰め込まれているジャガイモや玉ねぎを見て、感心したように呟く。
一方、生粋のお嬢様であるロミーナにとって収穫されたばかりの野菜というのは初めて見る物だったらしく、興味津々のようだ。
「書物を読んで知識としては持っていたけど、本当にお野菜って土の中にあるのね」
「この土地にはまだまだ収穫前の野菜がありましてな」
「アズベル様にもそのお手伝いをしてもらっているんです」
「領主のご子息が自ら？」
村人たちの声に真っ先に反応したのはパウリーネさんだった。
普通はそういうの領民任せで貴族はやらないからな。うちは弱小領だからそんな余裕ないけど。

ついさっきまで手伝っていたこともあって、服とか土まみれだし……もうちょっと早く準備をすればよかったか。
「こんな格好ですみません。すぐに着替えて――」
「あの、私にも何かお手伝いができませんか？」
「「「「えっ？」」」」
俺とパウリーネさん、そしてガナス村の人たちの声が重なる。
「ロ、ロミーナ様!?　まさか畑仕事をしようと!?」
「えぇ。アズベルもしているし、それに前々から興味はあったんです」
サラッと答えるロミーナだが、パウリーネさんは複雑な表情を浮かべている。
「し、しかし……せっかくのお洋服が……」
「大丈夫よ。着替えはちゃんと持ってきているんだし」
「そういう問題ではありません」
パウリーネさんは反対しているが、村人たちは嬉しそうに答える。
「まあまあ。とりあえず、そこにある芋を引っこ抜いてみるかい？」
「ぜひ！」
「あっ！　ロミーナ様！」
パウリーネさんには悪いけど、積極的に何かをしようとするロミーナの気持ちを無下にしたくは

ない。
とはいえ、さすがに本格的な作業をするのは急すぎるので、まずは手始めに小さな子どもでもチャレンジできる芋掘りからやることに。
すでにある程度は掘り返してあるのであとは引っ張るだけなのだが、それでも初体験となるロミーナにとってはなかなかしんどい作業のようだ。
見かねた俺が手を貸し、一緒になって芋を引っ張る。
周囲では「頑張れ」と村人たちが応援してくれ、最初は反対していたパウリーネさんもいつしか「お嬢様、あとちょっとです」と声援を送っていた。
そして、ついに――
「「わっ!?」」
俺とロミーナは芋が抜けた拍子(ひょうし)に後ろへと倒れる。
「ロミーナ様!?」
パウリーネさんが慌てて駆け寄るも、この程度で怪我はしない。ただ、懸念した通り、洋服は土まみれとなっていた。
でも、最後までやり遂げたロミーナの表情はとても晴れやかだった。
一方、村人たちは心配して彼女のもとへと駆け寄る。
「今すぐに薬草をお持ちします！」

「あぁ、せっかくの綺麗なお召し物が……」
「お、お嬢様、本当によろしかったのですか？」
「大丈夫ですよ。それに、とても貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございます」
返ってきたお礼の言葉に、村人たちは最初ポカンと口を半開きにしていたが、すぐに笑顔になり、歓声をあげた。
それを眺めていたパウリーネさんはなんだか複雑そうな表情のまま呟く。
「……近いですね」
「おっしゃる通り、領主の屋敷の近くにこれだけ大きな畑がある場所なんて、国中でもパルザン地方だけでしょうね」
俺がそう答えるが、彼女は小さく首を横に振る。
「そうではありません。村人と貴族との距離が、です」
「えっ？」
もちろん、相手が貴族ということでみんなの態度や言葉遣いは丁寧(ていねい)なものになっているが、公爵家令嬢を前にしても誰ひとりとして臆した様子はない。
パウリーネさんの話を聞く限り、ペンバートン家の領地ではこうはいかないらしい。
「あんな風に自然な笑顔を見られるなんて……もう不可能だと思っていました」
しみじみと、何かを噛みしめるように語るパウリーネさん。

……ペンバートン家では、いろいろとあったんだな。
そのことを感じつつ、ロミーナも到着したことだし、一度屋敷へ戻ろうとした――まさにその時、
「おやおや、ようやくご到着されたようだね」
またしても近くから女性の声が。
これは――
「イルデさん!?」
「そんなに驚かなくてもいいじゃないか」
箒に跨り、空から舞い降りるといういかにも魔女っぽい登場をしたイルデさん。相変わらず酒臭いな、この人は。
「アズベル様……誰ですか、この酔っぱらいは？」
アルコールの臭いが苦手らしいパウリーネさんは指先で鼻を摘まみながら俺に尋ねる。
「こちらはイルデガルドさんと言って、このパルザン地方に住んでいる魔女です」
「魔女？　もしや、ロミーナお嬢様に魔法を教えるというのは――」
「あたしだよ」
「……」
ドン引きしているパウリーネさん。
言いたいことは分かるけど、イルデさんの実力は本物だ。

立ち読みサンプル
はここまで

俺が生産魔法使いに向いていると即座に見抜くし、何より原作の【ブレイブ・クエスト】では後に大物となって登場するのだから。
とりあえず、イルデさんは優れた魔女であると説明するも、パウリーネさんは終始懐疑的な姿勢であった。
すると、このままでは埒が明かないと感じたイルデさんからある提案が。
「そこまで疑うなら結果で示そうじゃないか。――これからすぐにお屋敷で魔法の特訓といこう」
「……いいでしょう。ただし、進展が見られない場合は指導者を交代していただく」
「構わないよ」
あ、あれ？　なんか不穏な空気が流れてきたぞ？
場所をウィドマーク家の庭に移し、早速ロミーナの公開魔法特訓が始まった。
「公開」とつけたのは、俺とパウリーネさんだけでなく、ウィドマーク家とペンバートン家の関係者も見守っているからだ。
まあ、ペンバートン家の人たちの立場になってみれば、大事なご令嬢を預ける相手が酒臭い魔女ってなるとさすがに「ちょっと待て」と言いたくもなるよな。
一方、父上も母上も「イルデなら大丈夫」とまったく心配していない。
俺も自分の属性をスパッと見抜いてくれたという実績から、きっと大丈夫だろうと信じてはいる